

幼児の運動遊びに含まれる運動能力の要素と基本的な動きの種類

“Elements of motor ability” and “types of fundamental movement” included
in exercise play in early childhood

キーワード：運動能力調査，多様な動き，保育士

Keywords: motor ability survey, diverse movements, nursery teacher

堀内 亮輔

末永 祐介

長野 康平¹⁾

篠原 俊明^{2) 3)}

Horiuchi Ryosuke

Suenaga Yusuke

Nagano Kohei

Shinohara Toshiaki

¹⁾ 東比治山大学短期大学部

²⁾ 共栄大学教育学部

³⁾ 日本体育大学大学院後期博士課程

Tokyo Women's college of physical Education · Tokyo Women's Junior college of physical Education
Hijiyama Junior College Faculty of Education, Kyoiei University

Doctoral Degree Program, Nippon Sport Science University

Abstract

Since existing test methods may have negative effects such as inhibiting the motivation of young children to exercise, it is desirable to measure motor ability in a way that is closer to actual play scenes. In this study, in order to examine the method of measuring motor ability under conditions closer to daily life, the purpose of this study was to organize the motor ability and types of fundamental movement included in existing exercise play.

199 exercise play selected from books supervised and published by the Japan Sports Association. As a viewpoint of arrangement, the elements of motor ability 6 items used in MKS infant motor ability test, and 32 types of fundamental movement were set, and they were classified according to exercise play. As a result, the selected exercise play contained elements of all six items of motor ability. In addition, the fundamental movement was included in the exercise play selected by 31 types.

This result shows the possibility of capturing the motor ability of infants by the exercise play selected in this study. As a future prospect, it is necessary to examine whether it is related to the situation of exercise play selected in this study and the result of motor ability and the acquisition situation of fundamental movement. And, if the relation is recognized there, the agreement rate between the evaluation motor ability and fundamental movement through the observation of the exercise play by the nursery teacher and the measured value of the motor ability and fundamental movement will be examined.

要旨

既存のテスト方法では、幼児の運動意欲を阻害する等の負の影響をもたらす可能性があるため、より実際の遊び場面に近い方法での運動能力の測定が望まれる。本研究では、より日常生活に近い条件での運動能力の測定方法を検討していくために、既存の運動遊びに含まれる運動能力及び基本的な動きの種類を整理することを目的とした。

整理する運動遊びは、日本スポーツ協会が監修・発行している書籍から199種目を選定した。整理する観点としては、運動能力の要素はMKS幼児運動能力検査で用いられている6項目を設定し、基本的な動きの種類は32種類を設定して、運動遊びごとに分類した。その結果、選定した運動遊びには6項目全ての運動能力の要素が含まれていた。また、基本的な動きは31種類が選定した運動遊びに含まれていた。

この結果は、本研究で選定した運動遊びによって、幼児の運動能力を捉えられる可能性を示すものである。今後の展望として、本研究で選定した運動遊びと、運動能力の結果や基本的な動きの経験に関連があるのかを検討することが必要になる。そして、そこに関連が認められれば、保育士による運動遊びの観察を通じた運動能力や基本的な動きの評価と、運動能力や基本的な動きの実測値との一致率を検討することになる。

1. 緒言

文部省(現文部科学省)は、1964年の東京オリンピックの開催を契機に国民の体力・運動能力の現状を明らかにするとともに、体育・スポーツの指導と行政上の基礎資料を得ることを目的として、就学後の6歳から59歳を対象に体力・運動能力調査を実施し、その後、対象を79歳までに広げて、現在に至っている(スポーツ庁, online)。未就学である幼児においては、MKS幼児運動能力検査が1966年から実施されており、継続的に実施されている全国規模の唯一の運動能力調査となっている(町山, 2019)。この調査に関連して森ほか(2010)は、1986年に実施した調査を境に幼児の運動能力は低下しており、現在に至っていることを報告している。そして、運動能力調査は、身体活動量や動きの経験、保育形態、指導者の関与の有無など、様々な要因との関連性について検討されている(長谷川・前橋, 2009; 秋庭ほか, 2016; 吉田ほか, 2015; 杉原ほか, 2010; 内田ほか2018)。これらのことから、運動能力調査は、幼児の運動能力の実態や時代変遷を捉え、様々な要因との関連性を示すことで、幼児期の望ましい運動経験について検討する有効な指標の一つになっているといえる。

しかし、幼児の体力・運動能力調査は就学以降とは違い統一された調査が行われていない。岸本(2019)は運動能力測定項目に関して先行研究を概観した際、MKS幼児運動能力検査が最も多く用いられていたが、ほかにも東京教育大学体育心理学研究室作成の運動能力テスト、日本幼児体育学会提案の運動能力テスト、体育科学センターの調整力テスト、Gallahue and DonnellyのFundamental Movement Skills Modelといった評価方法が用いられていることを報告しており、測定方法の標準化が検討課題として挙げられている(村瀬, 2016)。また、保育現場における体力・運動能力の測定実施率に関する調査では、測定を実施している園は全体の2~3割程度であることが報告されており(村瀬ほか, 2013)、保育現場において運動能力調査の実施実態は不十分であるといえる。村瀬(2016)は、運動能力調査の実施率が低い理由に保育現場において測定の必要性に関する認識が低いことを挙げ、保育士は子どもの運動能力について、園内における日常の運動遊びの様子の観察を通して、把握されることが重要視されている傾向にあることや、測定実施に必要な器具を所有していない園が多いこと、保育士が測定結果を評価するための専門的な知識を学ぶ機会が少ないことを指摘している。

保育所保育指針(厚生労働省, 2017), 幼稚園教育要領(文部科学省, 2017), 幼保連携型認定こども園教育・保育要領(内閣府, 2017)(以下, 保育所保育指針等)には、「生活や遊びを通して総合的に保育する」ことの重要性について明記されているが、運動能力調査は日常の生活や遊びとかけ離れた状態で測定されることから、保育現場で実施されにくい状況にあると考えられる。

また、文部科学省(2012)は、幼児期運動指針を策定し、幼児期の運動経験として直接的な運動能力の向上を目指すのではなく、「多様な動きが経験できるように様々な遊びを取り入れること」をポイントとして挙げていることから、幼児の運動発達を捉えるには運動能力のみならず、経験している基本的な動きを把握する視点も重要であるといえる。これらを踏まえると、より日常の生活や遊び場面に近い状態で幼児の運動能力の実態や幼児が経験している動きを把握する方法を検討していくことは、保育現場で幼児の運動能力を把握することを容易にする可能性があると考えられる。

日常の遊びに近い運動能力調査の方法を検討していく為には、幼児が行う遊びに、どのような運動能力の要素や基本的な動きが含まれているのかを整理していく必要がある。これまでに幼児を対象とした運動遊びが紹介されている書籍等は多く存在している。子どもの運動のガイドラインに関する資料では、幼児期運動指針ガイドブックに幼児の発達特性に応じた運動遊びが多数紹介されている。また日本体育協会(現日本スポーツ協会)は、幼児期からのアクティブチャイルドプログラム(日本体育協会, 2015)において、さまざまな運動遊びを紹介している。一方で、保育所保育指針等には、小学校以降の学習指導要領解説体育編(文部科学省, 2018)のように、運動内容が例示されていない為、幼児期を対象としたガイドライン等に関する資料で紹介されている運動遊びにどのような運動能力の要素や基本的な動きが含まれているのかを整理することは、今後、日常の遊びに近い運動能力調査の方法を検討していくうえで意義があるといえる。日常の遊びに含まれる基本的な動きを整理した先行研究では、小澤ほか(2021)が、小学校低学年を対象に伝承遊びを多様な動きをつくる運動遊びの教材

として活用するために、伝承遊びに含まれる基本的な動きの種類を小学校教育要領解説体育編に示されている26種類の基本的な動きに沿って整理しているが、幼児を対象にしたものや運動遊びに含まれる運動能力の要素と基本的な動きの種類について整理された研究は見られない。

そこで本研究は、より日常生活に近い条件での運動能力の測定方法を検討していくために、既存の運動遊びに含まれる運動能力及び基本的な動きの種類を整理することを目的とした。

II. 方法

1. 対象および期間

本研究で対象とする運動遊びについては、日本スポーツ協会(日本体育協会時も含む)が監修・発行している「元気いっぱい遊ぼう楽しい運動遊び集」, 「JSPO-ACPアクティブチャイルドプログラム」, 「幼児期からのアクティブチャイルドプログラム」, 「ACPアクティブチャイルドプログラム子どものこころと体を育む楽しいあそび」で紹介されている運動遊び199種目を選定した(表1)。

また、選定した運動遊びは、その内容から「こんな運動できるかな?」, 「ロープ遊び」, 「ボール遊び」, 「伝承遊び」, 「鬼遊び」, 「新聞紙遊び」, 「模倣・表現遊び」, 「力強さ・バランス・柔軟性遊び」, 「コミュニケーション遊び」, 「身近なもの遊び」, 「走・跳遊び」に分類した(表1)。

なお、運動遊びの選定と分類は2021年10月に行った。

表1 運動遊びの種目

こんな運動できるかな？	ロープ遊び	ボール遊び
前を見てしっかり歩けますか	ロープを使って色々なポーズ（ストレッチ）バレリーナ	ついて捕る
後ろ歩かできますか	ロープを使って色々なポーズ（ストレッチ）エビ	続けてつく
早歩きができますか	ロープを使って色々なポーズ（ストレッチ）からだを一周	思いきりついてキャッチ
ゆっくり歩かできますか	変身して動こう 横ウサギ（左右に）	ボウリング
つま先歩かできますか	変身して動こう 横ウサギ（前後に）	2人組転がしてとる（いろいろな部位）
かかと歩かできますか	変身して動こう 電車 ロープを並べて跳んだり走ったり（路傍の柱木のイメージ）	手のひらで打つ（つく）
まっすぐ前を見て走れますか	乗せておこう あたま	ペットボトルなどをバットにして打つ（つく）
まっすぐ前を見て全力で走れますか	乗せておこう 背中に乗せてお馬さん	行きは跳る、帰りは持って走って戻ってくるリレー
曲がったコースを上手に走ることが出来ますか	乗せておこう おなかに乗せてクモ歩き	投げあげてキャッチ
素早く方向転換して走れますか	手でぶんぶん回そう（片手）	投げあげて手を叩いてキャッチ
テニスボールを投げあげて上手に捕ることが出来ますか	手でぶんぶん回そう（両手）	投げあげていろいろな部位にタッチしてキャッチ
ドッチボールを投げあげて上手に捕ることが出来ますか	ペットボトルをくっつけてくるぐる（片手）	2人でボール運び（ハンカチなどに乗せて）
ボールを速くに投げられますか	ペットボトルをくっつけてくるぐる（両手）	2人でボール運び（ハンカチなどに乗せて）リレー
上手にボールつがえますか	走りぬける	爆弾ゲーム
ボールをつながら進めますか	走りぬげる みんなで連続して	の当てゲーム
ボールを的に当てられますか	長縄を地面すれすれに回して跳び越える	4～5人で手をつなぎ輪になってボール運び
両足を揃えて速くに跳ぶことができますか	パラソル崩し2人でつなひき	4～5人で手をつなぎ輪になってボール運びリレー
両足を揃えて高く跳ぶことができますか	パラソル崩し 三角つなひき	転がしドッチ
台から上手にとび降りることができますか	ロープでキャッチボール	ボール集め
片足ケンケン跳びができますか	いろはにこんべいとう	ドリブル相撲
両足跳びの連続で前に進めますか	輪にしたロープをくぐる 縄くぐり（2人で）	ろくむし
ケンケンパー跳びがリズムよくできますか	輪にしたロープをくぐる 縄くぐり（チームで）	エックス
キャロップができますか	輪にしたロープをくぐる ロープ2本を輪にして投げた輪を相手かくぐる	エンドレスドッチボール
スキップができますか	背中合わせてロープ取り	宅配便ゲーム
両足跳びで回れますか（1/4）	赤はグー青はケン緑はパーで跳ぶ	ムカデドッチボール
両足跳びで回れますか（半回転）	置き方を工夫して跳ぶ	スクエア・ドッチボール
両足跳びで回れますか（1回転）	○はグー□はケン、△はパーでジャンプ	ボール送り競争
なわとびができますか	ロープで形をつくる	
片足で立っていられますか	長縄玉突き跳び	
マットの上で転がることが出来ますか（横転）		
マットの上で転がることが出来ますか（前転）		
平均台から落ちないように歩けますか		
鉄棒にぶら下がっていられますか		
マットの上で転がることが出来ますか（後転）		
伝承遊び	鬼遊び	新聞紙遊び
押しくらまんじゅう鬼	おいかけっこ	破くしっぽり
押しくらまんじゅう指導者や保護者に挑戦	ケンケン鬼	新聞紙を突き破ろう 走って
しり相撲	手つなぎ鬼	新聞紙を突き破ろう バンチして
足裏相撲	オオカミとコブタ	新聞紙を突き破ろう 棒で
引き相撲	ネズミ追がし1	いろいろなボールを投げてみよう（やり投げ）
手押し相撲	ネズミ追がし2	いろいろなボールを投げてみよう（ボール）
メンコ	ガッツケン（とこころん鬼）	いろいろなボールを投げてみよう（フリスビー）
コマ	子あしふみ（タッチ）鬼	いろいろなボールを投げてみよう（輪）
紙ひこうき	子とろ鬼	ボールをよけよう 前向けて当たらないようによける/捕る
紙鉄砲	おしくらまんじゅう	ボールをよけよう 相手が投げたものをよける
鬼ごっこ	しっぽとり	相手が投げたものを捕る
お魚ゲーム	バナナオニ	相手が投げたものを打つ
こおり鬼	レンジでチン	新聞の上でじゃんけん
どんじゃんけん	魚取り	新聞紙に変身
平均台でどんじゃんけん	木とリス	
タイヤでどんじゃんけん	グリーンティンク鬼ごっこ	
ゴム跳び	修行オニ	
Sケン ジャンケンバージョン	ペアこおり鬼	
親子でSケン ジャンケンバージョン	かっぱ鬼	
Sケン	十字鬼	
だるまさんがころんだ	背中合わせ鬼	
玉珠だるまさんがころんだ	玉珠鬼ごっこ	
かくれんぼ	色鬼	
缶けり	クモ鬼	
ポコペン	ジャンプオニ	
大波、小波	落とさず捕まえろ	
グリュ		
模倣・表現遊び	力強さ・バランス・柔軟性遊び	コミュニケーション遊び
二人組になって前の人を真似て歩く	ぶたのまるやき	ブレーメンの音楽隊
列になって前の人を真似て歩く	ぶたのまるやき（片手離し）	集合ゲーム
後出しまわっこ	ぶたのまるやき（2人組ジャンケン）	からだじゃんけん
後出しじゃんけん	おとっと（2人組）	ひよこの闘い
おいもごろう	おとっと（3人組）	人間知恵の輪
おいもごろうリレー	うーん	キャッチ
そうきんがけリレー	ペアタッチ（おしり）	落ち葉アート
進化じゃんけん	ペアタッチ（ひざ）	全力あっち向いてホイ
ゆりかご遊び	ペアタッチ（タオルとり）	
かえるの足うち	ペアタッチ（土俵）	
アザラシ歩き	大根抜き（手つなぎバージョン）	
言うこと一筋、やること一筋	大根抜き（胸組みバージョン）	
身近なものの遊び	走・跳遊び	
かき袋投げ	カッパリレー	
レジ袋投げ飛ばし	追って追われて	
レジ袋両足跳び	風船リレー	
レジ袋 投げあげてキャッチ	横並び正面跳び	
レジ袋 投げあげて体の部位でタッチ	ねことねずみ	
レジ袋 リーフティング		

2. 運動能力の要素の選定

運動能力の要素は、町山(2019)が、MKS幼児運動能力検査は全国規模を持ち継続的に実施している唯一の調査になっていると述べていることから、MKS幼児運動能力検査で行われている調査項目「立ち幅跳び(跳躍力、瞬発力)」、「ソフトボール投げorテニスボール投げ(投能力、協応性)」、「25m走or往復走(走力、スピード)」、「体支持持続時間(筋持久力)」、「両足連続跳び越し(敏捷性)」、「捕球(捕球力)」の6項目を選定した。

3. 基本的な動きの種類の設定

基本的な動きの種類は、石河ほか(1980)が分類した84種類、中村(2011)が作成した36種類(体のバランスをとる動き9種類、体を移動する動き9種類、用具を操作する動き18種類)を参考に、共著者と協議のもと、体のバランスをとる動き7種類、体を移動する動き8種類、用具を操作する動き17種類の計32種類を設定した。なお、協議に際して本研究で選定した運動遊びにおいて、水、砂、マット、乗り物を用いた運動遊びが紹介されていないことから「うく」、「およぐ」、「ほる」、「さかだちする」、「こぐ」は削除した。また、篠原ほか(2020)は園庭での自由遊びにおける基本的な動きを捉える際、幼児の日常的な遊びを鑑みて「つく」を新たに設定しているが、本研究でもボールを用いた運動遊びを選定していることから、「つく」を新たに設定した。

4. 運動遊びに含まれる運動能力の要素と基本的な動きの種類分類

運動遊びに含まれる運動能力の要素と基本的な動きの種類分類は、原則的に第1著者が行った。分類が主観性によらず、より妥当性の高いものとなるように分類を3回行った。また、1回目と2回目以降で分類にズレがあった際には、幼児の運動能力や基本的な動きを専門とする共著者の意見を参考に整理した。

III. 結果

199種目の運動遊びに含まれていた運動能力の要素と基本的な動きの種類は、表2に示した通りである。各運動能力の要素を含む運動遊びの種目数は、「25m走or往復走」が42種目で最も多く、次いで「ソフトボール投げorテニスボール投げ」が23種目、「捕球」が21種目、「両足連続跳び越し」が21種目、「立ち幅跳び」が19種目、「体支持持続時間」が12種目と続いた。

199種目の運動遊びに含まれる基本的な動きの種類をみると、選定した32種類の動きのうち、「すべる」を除く31種類の動きが確認された。32種類の基本的な動きのうち、いずれかの動きが含まれる運動遊びは、中央値9.5種目、最小値0種目、最大値74種目であった。運動遊びに最も多く含まれていたのは「たつ」で74種目、「つかむ」で71種目、「はしる」で69種目、「とぶ」で42種目、「はねる」で39種目、「あるく」で35種目、「なげる」で35種目、「とる」で31種目、「くむ」で6種目、「ささえる」で15種目と続いた。

基本的な動きの系統別にみると、199種目中「体のバランスをとる運動遊び」が(93種目)、「体を移動する運動遊び」が(126種目)、「用具を操作する運動遊び」が(127種目)であった。

IV. 考察

本研究は、より日常生活に近い条件での運動能力の測定方法を検討していくために、既存の運動遊びに含まれる運動能力及び基本的な動きの種類を整理することを目的とした。運動能力の要素は、全国規模で継続的に実施されている唯一の調査である(町山, 2019)ことから、MKS幼児運動能力検査で行われている「立ち幅跳び」、「ソフトボール投げorテニスボール投げ」、「25m走or往復走」、「体支持持続時間」、「両足連続跳び越し」、「捕球」の6項目を選定した。その結果、選定した199種類の運動遊びには、6項目全ての運動能力の要素が含まれていた。

例えば、立ち幅跳びは伝承遊びで紹介されている「グリコ」が挙げられる。この運動遊びは、跳ぶ動きが含まれていることに加えて、遠くに跳ぶことを必要とするため、立ち幅跳びに係る跳躍力や瞬発力を捉えられる可能性がある。ソフトボール投げorテニスボール投げは、ボール遊びで紹介されている「爆弾ゲーム」が挙げられる。この運動遊びは、投げる動きが含まれていることに加えて、遠くに投げるのが求められるため、ソフトボール投げorテニスボール投げに係る投能力や協応性を捉えられる可能性がある。25m走or往復走は鬼遊びで紹介されている「鬼ごっこ」が挙げられる。この運動遊びは「追う-逃げる」役割があるものの、どちらの役割においても全力で走ることが求められるため、25m走or往復走に係る走力やスピードを捉えていける可能性がある。体支持持続時間は力強さ・バランス・柔軟性遊びで紹介されている「ぶたのまるやき」が挙げられる。この運動遊びは、持続して自分の体を保持することが求められるため、体支持持続時間に係る筋持久力を捉えられる可能性がある。両足連続跳び越しは鬼遊びで紹介されている「ジャンプオニ」が挙げられる。この運動遊びは跳ぶ動きが含まれていることに加えて、連続して跳ぶことを必要とするため、両足連続跳び越しに係る敏捷性を捉えられる可能性がある。捕球はボール遊びで紹介されている「投げあげてキャッチ」が挙げられる。この運動遊びは、直接的にボールを捕球することが求められるため、捕球に係る捕球力が捉えられる可能

性がある。各運動能力の要素に対して、ここでは代表的な運動遊びを例示したが、今後は、実際の測定時に行う運動遊びの種目について、測定方法も含めて検討していくことで、運動遊びを観察することによって幼児の運動能力を捉えられる可能性があると考えられる。

ところで、運動場面の観察による推定と運動能力の実測値との関連について、及川(2013)は、日常の運動行動の観察に基づく保育士による幼児の運動能力の推定値と実際の運動能力の実測値との関係は、走能力は比較的推定の精度が高いものの、跳能力と投能力の精度はあまり高くないことを報告している。また、亀岡(2020)は幼児の運動能力における保育士による主観的評価の一致度について検討しており、走能力に比べて、跳能力、投能力、体支持持続能力の実測値と保育士による主観的評価が不一致だったことを報告している。これらを踏まえると、現状のままでは、運動遊びから幼児の運動能力を捉えていくことは困難であるといえる。しかし、及川(2013)、亀岡(2020)の保育士による幼児の運動能力の推定値や主観的評価の捉え方は、保育士が普段の幼児の姿を回顧して、回答式によって評価したものであり、幼児の運動遊びを直接的に観察して、運動能力を評価したわけではない。村瀬(2016)が、保育士は子どもの運動能力について、日常の運動遊びの様子の観察を通して、把握されることが重要視されている傾向にあると指摘していることから、今後は保育士による幼児の運動遊びの観察を通した運動能力の評価指標を検討していく必要があると考えられる。アクティブチャイルドプログラムでは、動作に着目して、疾走動作、跳躍動作、投球動作の評価方法について紹介しているが(日本スポーツ協会,2020)、評価指標を検討していく際には、こうした「動作」に着目することも必要であると考えられる。そして、運動能力調査の実測値との関連について検討していくことも重要であるといえる。

本研究で整理する基本的な動きの種類は、石河ほか(1980)が分類した84種類、中村(2011)が作成した36種類の動きを参考に32種類の動きを設定した。その結果、本研究の対象とした運動遊びには「すべる」以外のすべての動きが含まれていた。「すべる」

動きはすべり台等の固定遊具やタオルや靴下等の生活用品を用いた運動遊びから引き出されると考えられるが、今回の運動遊びでは固定遊具を用いた運動遊びや生活用品を用いた運動遊びが紹介されていなかったことが「すべる」動きが確認されなかった理由であると考えられる。本研究において、基本的な動きを設定する際に「うく」、「およぐ」、「ほる」、「さかだちする」、「こぐ」動きは削除したが、幼児の運動経験の一つに多様な動きを経験することの重要性が示されていることから(文部科学省, 2012)、今後はこれらの動きが引き出されると予想される、水遊び、砂遊び、マット遊び、乗り物遊びを含め、固定遊具や生活用品を用いた運動遊びを加えて基本的な動きの種類を整理していくことも必要であるといえる。また、選定した運動遊びの中には「たつ」、「つかむ」、「はしる」、「とぶ」、「はねる」等の多く含まれている動きと、「のぼる」、「おさえる」、「つむ」、「たおす」、「すべる」等のあまり含まれていない動きがあり、例示されている運動遊びに含まれる基本的な動きには偏りが見られた。小学校体育に関する研究になるが、長野ほか(2021)は、小学校教員が体づくり運動の授業を構想する際の参考資料に関する研究において、小学校学習指導要領解説体育編等の行政資料は、すべての教員を対象としてつくられ、内容を理解するために作成されているものの、すべての教員が活用しているとは言い難く、教員の特性を踏まえた活用しやすい資料を作成する必要性について指摘しているが、これは幼児期を対象としたガイドライン等の資料においても同様のことがいえる。その一つとして、今後は保育士がガイドライン等の資料をより活用しやすくなるよう、例示されている運動遊びで、基本的な動きの経験に偏りがないように整理していく必要があると考えられる。また、運動遊びにあまり含まれていない動きに焦点を当てて新たな運動遊びを考案していくことも重要であるといえる。そして、今後は運動能力と同様、保育士による運動遊びの観察を通して、幼児が経験している基本的な動きを捉える評価指標を検討していく必要があると考えられる。杉原ほか(2011)は、幼児の基本的な動きの経験について、出現割合と出現頻度から把握することを試みているが、生活や遊び全般の動きを捉えており、必ずしも

運動遊び場面に着目したのではないため、運動遊び場面に着目した評価指標を検討していくことが必要であると考えられる。また、長野ほか(2019)、篠原ほか(2021)は幼児の自由遊び中における基本的な動きを把握する研究を実施しているが、これらの研究の方法を参考に、運動遊びの観察を通じて保育士が捉えた基本的な動きの評価と基本的な動きの実測値との関連について検討していくことも重要であるといえる。

V. まとめ

本研究は、より日常生活に近い条件での運動能力の測定方法を検討していくために、既存の運動遊びに含まれる運動能力及び基本的な動きの種類を整理することを目的とした。その結果、以下のことが明らかになった。

- 1) 選定した運動遊びは、6項目全ての運動能力の要素が含まれていた。
- 2) 選定した運動遊びは、基本的な動きの32種類のうち、31種類の動きが含まれていた。
- 3) 選定した運動遊びは多く含まれている動きとあまり含まれていない動きがあり、確認された基本的な動きの種類に偏りが見られた。

以上のことから、選定した幼児の運動遊びは、運動能力に係る要素が含まれていることや基本的な動きを経験することに寄与する可能性が示唆された。また、ガイドライン等の資料において、基本的な動きに偏りのない運動遊びを例示していく必要性が示唆された。これらを踏まえて、今後は保育士による運動遊びの観察を通じて、幼児の運動能力の実態や経験している基本的な動きを把握するための評価指標を検討していくことや、保育士による観察的な評価と客観的な実測値との関連について検討していくことが必要であると考えられる。また、選定した運動遊びに運動能力の要素や基本的な動きに偏りがなく整理することや新たな運動遊びを考案して、保育士がより活用しやすい参考資料を作成していく必要があると考えられる。

参考文献

油野利博(1988) 幼児の自由遊び中における動きの

- 種類について. 鳥取大学教育学部研究報告, 教育科学, 30 (2), 263-273
- 秋武寛, 安部恵子, 三村寛一 (2016) 幼児の運動能力に対する歩数および運動強度との関係. 発育発達研究, 70, 17-26
- 長谷川大, 前橋明 (2009) 保育園幼児の園内生活時の歩数と体力・運動能力との関連. 幼少児健康教育研究, 15 (1), 12-20
- 石河利寛, 栗本関夫, 勝部篤美, 近藤充夫, 前川峯雄, 松田岩男, 森下はるみ, 清水達雄, 末利博, 高田典衛 (1980) 幼稚園における体育カリキュラムの作成に関する研究I, カリキュラムの基本的な考え方と予備的調査の結果について. 体育科学, 8, 150-155
- 亀岡雅紀 (2020) 幼児の運動能力における保育者による主観的評価の一致度-実測値による客観的評価との比較-. 現代社会文化研究, 71, 19-29
- 岸本みさ子 (2019) 幼児の運動能力に関する2000年以降の研究動向と今後の課題-運動能力を測定する項目からの検討-. 大阪総合保育大学紀要, 13, 193-206
- 厚生労働省 (2017) 保育所保育指針解説書. フレーベル館
- 町山太郎 (2019) 幼児及び低学年児童の運動能力調査項目等の変遷及び活用に関する研究. 日本学習社会学会年報, 15, 49-60
- 文部科学省 (2012) 幼児期運動指針ガイドブック～毎日楽しく体を動かすために～. 文部科学省
- 文部科学省 (2017) 幼稚園教育要領. フレーベル館
- 文部科学省 (2018) 小学校学習指導要領解説体育編. 東洋館出版社
- 森司朗 (2011) 幼児の運動能力における時代推移と発達促進のための実践的介入. 平成 20～22 年度文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究 B) 研究成果報告書
- 森司朗, 杉原隆, 吉田伊津美, 筒井清次郎, 鈴木康弘 (2010) 2008年の全国調査からみた幼児の運動能力. 体育の科学, 60, 56-66
- 村瀬智彦 (2016) 幼児の体力・運動能力の測定と評価の研究動向-研究と保育の両面からのアプローチ-. 教育医学, 61 (3), 246-256
- 村瀬智彦, 春日晃章, 中野貴博 (2013) 保育現場における体力・運動能力評価基準値の利用について. 愛知大学体育学論叢, 19, 1-8
- 長野康平, 篠原俊明, 中村和彦 (2021) 小学校教員の体づくり運動領域における指導実態と意識: 所属研究部と教職歴による検討. スポーツ教育学研究, 41 (2), 49-66
- 長野康平, 浅川孝太, 倉茂花苗, 中村和彦 (2019) 保育園と公園での自由遊びにおける身体活動量と基本的動作. 日本幼少児健康教育学会誌, 4 (2), 71-80
- 内閣府 (2017) 幼保連携型認定こども園教育・保育要領. フレーベル館
- 中村和彦 (2011) 運動神経がよくなる本. 株式会社マキノ
- 日本体育協会 (2015) ACPアクティブチャイルドプログラム子どもの心と体を育む楽しいあそび. 株式会社ベースボール・マガジン社
- 日本体育協会 (2015) 幼児期からのアクティブチャイルドプログラム. 日本体育協会
- 日本スポーツ協会 (2020) 元気いっぱい遊ぼう楽しい運動遊び集. 公益財団法人日本スポーツ協会
- 日本スポーツ協会 (2020) JSPO-ACPアクティブチャイルドプログラム. 公益財団法人日本スポーツ協会
- 及川直樹 (2013) 保育者による幼児の運動能力の推定精度-実測値の評定に対する推定値の一致率に着目して-. 発育発達研究, 58, 52-62
- 小澤哲也, 金沢翔一, 長野康平, 浅川孝太, 中村和彦 (2021) 伝承遊びを教材とした多様な動きをつくる運動遊びの授業実践: 出現した基本的な動きと身体活動量による検討. 体育学研究, 66, 533-549
- 篠原俊明, 長野康平, 中村和彦 (2020) 園庭での自由遊びにおける基本的な動きの特徴-身体活動量の違いによる検討-. 日本幼少児健康教育学会誌, 6, 13-22.
- 杉原隆, 近藤充夫, 森司朗, 吉田伊津美 (1999) 幼児の運動能力判定基準と, 園・家庭環境および遊びと運動発達の関係. 体育の科学, 49 (5), 427-

434

杉原隆, 吉田伊津美, 森司朗, 筒井清二郎, 鈴木康弘, 中本浩揮, 近藤充夫 (2010) 幼児の運動能力と運動指導ならびに性格との関係. 体育の科学, 60, 341-347

スポーツ庁(online) 体力・運動能力調査の概要: スポーツ庁. https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/toukei/chousa04/tairyoku/gaiyou/1368160.htm (参照日2021年10月16日)

内田智子, 大井拓也, 筒井清次郎 (2018) 幼児期のラダー運動遊び, サーキット遊びおよび自由遊びが体力・運動能力向上に与える影響: 内発的動機づけを重視した運動プログラムに注目して. 発育発達研究, 78, 1-12

吉田伊津美, 森司朗, 筒井清次郎, 鈴木康弘, 中本浩揮 (2015) 保育者によって観察された基礎的運動パターンと幼児の運動能力との関係. 発育発達研究, 68, 1-9